

# 文化高知 48

## 若者の定着する街

安藤 禎彦

瀬戸大橋に続き大豊一川の江間、善通寺ー西高松間と、四国横断自動車道が開通し、本格的な高速交通時代が到来した。この様な流通の時間短縮により消費者の商圏が県域を越えて拡大され、高知市の商圏図が新しく塗りかえられようとしている。

また、バブルの崩壊後、一般に心理的な不況感が広がり、ムード的な消費控えの結果、県内需要が全く伸びず、県外客が増加したにもかかわらず、景気は横ばいの状態である。毎日のようにバブル経営悪化のニュースが流れ、株式市場もいつ回復するか分からない状態では、消費者マインドの向上も望めない厳しい状況である。

そして、今までのように、マスコミや広告に頼っていた旧来の「トレンド情報発信」のメカニズムがあまり機能しなくなってきた。このような厳しい現状の中で我々小売業も必死になって、新しい街づくりを模索している。

「高水準な小売機能とより良いサービスの提供」をファウンデーション(基

礎)として、多様な機能を備えた街としての複合施設の充実、そして歴史や文化、自然を十分に生かした独自性のある創造的な街づくりを夢見ている。



「クレマチス」 福 富 榮

十年前先、二十年前先を考えた街づくりを実現させるためには、地元の自治体や商店街、学識経験者などが一体となり、高知県の人口を増やし、若者が大勢集まり、生き生きと働ける街を創ることが先決問題である。若者の定着しない街にどうして発展が望めようか。

大学や、種々の専門学校の新設、あるいは企業誘致の問題、文化施設や教育の充実など、我々の環境を取り巻く多くの課題をどこまでクリアしてゆけるかが最大のポイントであり、また、人口増への近道であると考ええる。

今や、我々商人が物だけを売って利益を得る時代は過去のものとなりつつある。

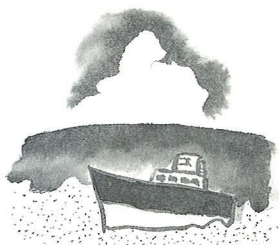
新しい時代の二十一世紀の商人は、愛する自分達の文化や歴史を守り育て、次の時代の担い手となる若者のためにも、今こそ努力を惜しんでほしいと思う。

このような夢を実現させるためにも、街の活性化のためにも、今なが一番必要なかという問題意識から出発しなければならぬ。

(高知県・市商店街振興組合  
連合会理事長)

# 思い

岡本 弘



高知の高校時代の同級生のお嬢さんが、東京目黒の「雅叙園」で挙式を行った。私も友人として出席させていただいた。

私にはある期待があった。それは数人ではあるが、同級生の顔が見られ、挙式後同級生で、花嫁の父を着に酒でも飲みたいと思っていたからである。

ところが高知からの友人の姿はなく、空しい思いで帰宅した。東京に住みついて、早くも四十年近く過ぎてしまった。

四十年の間、高校時代の友人の消息は四国山脈を越え、私の耳にも聞こえていた。

みんな頑張っている。自分も頑張らなければと新聞界、出版界というマスコミを駆け抜けてきた。

ハッと気がついたのだが、五十五歳を過ぎてから耳にしていた友人たちの消息が突然途絶えるようになってしまった。

高知に在住している友人に尋ねても「わからない」という返事が返ってくるだけ。情報源の一人が突然死亡、私の前から消えた。

彼等はいま何処で何をしているのか。高知城の片隅で学生の本分を忘れ酌み交わした酒の味、他校生との喧嘩、それらが走馬灯のように流れている。

大学の友人より、高校時代の友人のことをより多く思いだされる昨今である。

何故だろうと考えてみる。

それは故郷への思いと繋がっているのではないだろうか。同級生の人一人が高知なのかも知れない。

生まれは宿毛市である。学生時代は幡多郡宿毛町であった。過日、母親が入院したとの知らせで宿毛に。

高知市内から、四時間の道のりである。あまりにも遠い郷里である。数年後には、「土佐くろしお鉄道」

が開通するとのことだ。郷里は少しづつではあるが近づいてきている。

私は土佐の高知が好きだ。本音で話し合えるからだ。殴り合い、激論を交わしても、翌朝は「元氣かや」で、もとの友人に戻っている。

目の前に広がる太平洋、人を寄せつけない四国山脈に囲まれた僅かな平野で、他県人では味わえない温もりを感じるのだ。

生まれ郷里の土佐を誇りに生きてきた。仲間や友人、社員にも自慢し続けている。

そんな大切な大好きな高知を出たのかと自分自身に問いかけてみるが、答がない。何故だろう。これからの人生のなかでこの糸をほどいてみたいと思っている。

焼きつけられた高知は四十年も昔の風景である。帰郷することになれば変わっていく高知は目をみはるものがある。県知事も他県の人を選んだ。昔の土佐人では考えられなかった。

たことが現実として起きています。高知はどのように変わっていくのか、楽しみだ。ただし、少しではあるが私としては淋しい。

人生の大半を東京で生活しているが、どうしても東京の生活に馴染めないでいる。

幼いころの思い出、親から自然に教わったであろう故郷の習慣、母親の料理から自然に「舌」が覚えた味、東京での生活が長くなった今でも現在の生活を否定するのだ。

高知県出身の元大関朝汐が、若松部屋を継いだ。そして、東京後援会の会長を頼まれた。数回お断わりしたが、親方の出身地が高知ということでお引き受けをしてみました。

親方も高知、大阪(近大)、東京(大相撲)と高知を遠い故郷にしている。若松親方は若い。しかし私の歳になった時、生まれ育った高知を思いだし懐かしく思い出すだろう。彼の気持の中に「同県人が応援してくれている」と、土佐の香りを側に置いていたいという気持で一杯なのだ。

故郷は遠くにありて想うもの——という詩があるが、私は、故郷を見捨てたことは大きなあやまりであった——

と心のなかで書きかえている昨今である。

(株)日本ジャーナル出版社長)

## 小林秀雄との出会い

——奇計にかけて初見する——

岡田 里實

森木虎喜という人

私が小林秀雄を発見したのは二十歳の時、昭和四年だったが、それまで十五歳のとき知り合った五歳年長の森木氏の非凡な天才から厳しい鍛練を受けていた。

それがなくてはそんな発見はありえないと思うので一言したい。森木氏の剃刀のような鋭い知性と、芸術の百科に通じたその権威漲る唇からあふれ出る言葉は、玉のような完成された名文であった。土佐の三大歌人の一人と言われ「早秋」という歌集もあり、絵画に対する深奥な鑑賞力は画会甲矢会の会長吉岡逸成氏の推挙によって一枚の画も書かぬうちに甲矢会の会員になっていた。短歌に対してどんな見識を持っていたか、私に示した次の森厳な短歌をみれば分かると思う。

アララギ派伊藤左千夫 作

あめつちの四方の寄り合を垣にせ

九十九里の浜に玉拾い居り

森木氏は私の三十一歳の時夭折したが、私は私の中で森木氏がものを考え、そして感じていると考える人間となつてしまっている。

様々なる意匠

昭和四年夏、二十歳の私は雑誌「改造」に掲載された小林秀雄の懸賞論文(第二席)「様々なる意匠」を読んで驚嘆した。私はこれほど個性溢れる名文を読んだ事はなかった。こんなスタイルの思考に出合った事はなかった。文学以外の自然科学や哲學的教養まで文外に漂っていた(私のこの予感正しかったと後年分かった)。私はこの人の天才を確実に見たと信じた。私は口を極めて推奨

した。文壇の事情に明るい先輩が「改造」の前月号を持ってきて、懸賞第一席の宮本顕治の「敗北の文学」を見せてくれた。私は一読して才能の足りない凡作であると判断し、これは伸びないと行って、日本ジャーナルリズムの知性の地盤沈下によるネジレ現象がこの序列の中にある事を痛感した。以来私は小林秀雄の署名のある出版物を追跡し、前人未発の文芸批評の真形をまざまざと見極めることが出来たのであった。かくて昭和十七年を迎えた。私は三十三歳になり、小林秀雄は四十歳、「無常」ということの名著を出して日本文壇の最高峰と目されてきた。

小林秀雄との会見

小林秀雄は数人の作家と初めて来高し、追手前高校の講堂で「歴史について」孤高の意見を滝のような弁舌で理路整然と述べた。私は翌日旅館「松竹」に電話して会見を申し入れた。お手伝いさんが電話口に出て、「何の御用かと問うておられます」と来た。小林秀雄は東京人だが、土佐人にくらべても超特級のイゴッソウである事を私は知り抜いていた。下手すると断られるに決まっていた。私は彼を雪隠詰にするような奇計を思いついて、次のごとく言い放った。「私は文学青年でも何でも

ない、先生にお会いせねばならぬ何の用件も理由もない。だからお目にかかせて頂きたい、とお伝え願う」、私はこれで小林氏は会わぬとは言えなくなったと確信して返事を待った。果然！「おいで下さいませと：」と来た。私はすぐ自転車を走らせた。先生はただ一人旅館にいた。私達は三時間いろいろの話をした。「原稿を送って来なさい」と言われて貰ったが、よう送らなかつた。それで今なお無名である。私のように小林秀雄を怖れてジャーナリズムに浮かび上がれなくて水面下に沈んでいる文学青年が、日本に五百名はいると言った人がいる。



小林秀雄

先生はその後も来高された。誰にも会わぬと宿へ言い含めてあったそうだが、私が「岡田だと言って下さい」と頼むと玄關まで出迎えて下さった。小林秀雄に対するネジレた評価は氏の一生続き、今なお続いている。

(伊野町在住)

# 牧野富太郎博士を思う

水野 進

私が牧野富太郎博士にご指導をいただくことになったのは、昭和二十四年のことで青少年の文化向上のため「土佐文化向上会」をつくった際、最高顧問をお願いした時からである。牧野博士の伝記は先輩の方々により沢山出版されているが、今年には博士の生誕百三十周年に当たるので、保存している記録書により伝記にあまり記載されていない若き日の指導者としての博士、晩年の教育者としての博士などについて書きたいと思う。

牧野博士は文久二年（一八六二）四月二十四日に高知県高岡郡佐川村西町組一〇一番屋敷（現佐川町）に生まれ、幼名誠太郎、明治元年（一八六八）数え年七歳の時に富太郎と改名している。明治四年数え年十歳の時に佐川町西谷の土居謙護氏の寺小屋で勉強をし、後に同町目細谷の伊藤蘭林塾、そして名教館で学んでいる。

邸址の近くの金峰神社の境内に生えている、「バイカオウレン」を送っ

て欲しいとの手紙が博士からたがび届き、その都度お送りしたが、「バイカオウレンが東京大泉の家で花を出して開きましたらまこと懐かしく思うであろうと存じます。吾等の少年時代を思い出します。この花は私にはまことに印象深いものです」と手紙に書いておられるが、私はこのかれんな花を咲かすバイカオウレンこそ、博士の少年時代の最も思い出の深い植物ではなかっただろうかと考えるのである。その頃の思い出を「コボテ見に朝山に行く路楽し」「コボテ見に毎朝行けど鳥取れず」と手紙に書かれている。

さて明治十四年四月、博士は数え年二十歳の時に第二回内国勸業博覧会見物を兼ね、顕微鏡、参考書購入のため上京しているが、前年の十三年には高知市の五松学舎に学び永沼小一郎氏と知友になり、植物学を学んでいる。

明治十四年八月には、佐川町の青年有志たちにより「同盟会」という会が出来て自由民権運動を唱えてい

るが、博士も幼友達の外山頼寛、林虎彦氏などと共に入会している。同十五年六月には「同盟会」を「公正社」と改め博士は選挙により任期六カ月の副社長に当選しており、指導者として活躍している。この時博士は数え年二十一歳であり、会員は七十三名であったがこれらの人は後年各界において大いに活躍している。また会計係にもなっているが、実にすばらしい会計報告書を提出してい



祝電をみる 94歳の誕生日

る。「公正社」の総会を欠席するための特認願いが記録書に残っているが、その中に「私儀此度東京府下へ旅行仕候間本社定期並に臨時総会へ出席難相且其都度届書等相整候間此之段御許認相蒙度奉願候也。明治十七年四月二十五日 社員 牧野富太

郎 ㊦とあり、これは二度目の上京のため提出されたものと思われる。「公正社」も明治十七年十二月には「佐川学術会」と改称し、規則も第一条に「本会は同志会合して学術を講究するを以て主旨とする」となっており、博士はこの会で十二月二十日に「進化の略説」、十八年一月十七日に「花の構造」、十八年二月七日に「人獣同祖論」を発表している。この後明治十八年七月には「小学畫帖」を発行し植物学の振興に努め、また、英学会や理学会をつくり青少年の指導者として活躍しているのである。

「土佐文化向上会」は博士にいろいろとご指導いただいたが、会の発足五周年記念式には文化向上研究会員に告げる言葉として「軽佻浮華、苟且偷安に流れては何にもならない。平素身体の健康に留意しつつ実質的に勉強して基礎の知識を蓄へざれば決して物の役に立つ人物とはなれない。青年諸君は他日日本になう大責任ある身なることを自覚し、いづかどの人間にならんことを期待すべきものである」との激励文をいただいた。牧野富太郎博士は偉大な植物学者であったと同時に青少年のよき指導者、教育者であったと私は思うのである。

（元土佐文化向上会会長）

# 土佐とヤイロチョウ

山下 隆文



百足をくわえるヤイロチョウ

山に若葉が茂り、アカシヨウビンやサンコウチョウの音が聞こえ、春から夏へと移り変わろうとしている頃、谷川の少し冷たいが心地好い風と共に、「ホヘーン、ホヘーン」と妙に淋しく悲しげな声が聞こえだす。

この声の主がヤイロチョウだ。ヤイロチョウは世界に約二十五種、その内の一種が日本に渡来する。主に東南アジア、インドからオーストラリアに分布し、全長約一八センチ、夏鳥として五月頃、主に西南日本に渡って来る。

現在、環境庁の日本版レッドデータブックの絶滅危惧種（絶滅の危機に瀕している種、又は亜種。もしも現在の状態をたたらした圧迫要因が引き続き作用するのならば、その存続は困難なもの。トキヤイヌワシなどと同ジャンル）、特殊鳥類、ワシントン条約附属書Ⅱに掲げられていて、その譲渡等が厳しく禁止されている数少ない貴重な野鳥である。

昭和十二年六月、日本では初めて高知県で営巣が確認され、その後高知県の県鳥に指定され、県の自然のシンボルとしても県民に親しまれている。

昔から幡多地方には、ヤイロチョウにまつわる昔話がある。猟師が、シロベエ、クロベエという二匹の猟

犬を連れて山に入ったが、途中、大蛇に出合い二匹は勇敢に立ちむかっただが、とうとう飲み込まれてしまった。その後、毎年夏になると生前二匹の犬がかけまわった山に、シロベエ、クロベエと鳴く美しい鳥が現れるようになった。という昔話だが、昭和四十九年の「高知林友」に掲載された沢田佳長氏の「森の精ヤイロチョウ」によると、この昔話が伝わる大物川山（現宿毛市）が、日本で初めてヤイロチョウの営巣が確認された場所で、高知県の姿の初確認は、昭和四年に高知市の隣の鏡村梅の木であると書かれている。

日本産の野鳥では最も美しいといわれるヤイロチョウ。その美しさは体の色の多彩にある。名のとおり八つの色の体色を持つといわれているが、私が見るかぎり七色しか目につかない。体の下腹部にある通称赤フンドシといわれる赤紅色、頭部の茶色、過眼線（目のまわり）の黒、羽根の薄いブルー、飛ぶと現れる翼の白い斑、翼から背にかけてのコバルトブルー、腹部の黄色、これで七色だが、これに足の色を加えて八色となるのか、光線の具合でエメラルドグリーンに変わる背の色を加えるのか、それとも腹部の黄色と、眉の部分の濃い黄色を分けるのか、いろいろと調べてはみたが、とうとう分か

らなかつた。写真等でヤイロチョウだけを見ると大変派手な色で目立つように思えるが、生息地の常緑広葉樹の生い茂った合間から少し木もれ日の入るような林の中で見ると、この色がまったく目立たなく、かえって保護色になつていくことがわかる。その為、見つけにくく個体数が少ないことが「幻の鳥」といわれる所以だろうと思われる。

ヤイロチョウの日本での確認例は、秋田県以南で数カ所あるが、繁殖が確認されたのは本州の一部と九州で、その他の営巣確認は、ほとんどが高知県であり、高知県民がヤイロチョウを守らなければ絶滅にどんどん近づいていくだろう。二年前、県中部では初めて営巣が確認された土佐市宇佐町は、ゴルフ場計画予定地内での発見だった。このように高知県でも、リゾート開発、森林開発等で生息営巣地の広葉樹林が急激に減少し、ヤイロチョウのおかれている状況は危機に瀕している。

この県民共通の財産を絶滅に追いやらない為にも、ニホンカワウソと同じ運命をたどらせない為にも、高知県民が絶対に守らなければいけない生命である。

（日本野鳥の会会員）

### 酒に心に染みるひとことを

三谷 英子



『ブリティッシュマン』という映画に、こんなシーンがあった。リチャード・ギア扮するエリートビジネスマンが、女の子にシャンパンをすすめながら、スーッと唇をさし出す。  
 「なぜ？」と怪訝そうな彼女に、  
 「シャンパンが引き立つ」とひとこと。さり気なくボソッと呟くのが、実におしゃれなのである。

私はまだ二十歳の頃、野菊の花束とワインを手に、「英子さん、ピクニックに行きましょう」と誘ってくれた男がいる。友人に話すと「へえ、変わっちゃった」と言っただけ、身をよじって大笑いした。  
 「キザかスマートか？」人の好みは千差万別だけに反応もさまざまだ。  
 それ以来、私は花鳥風月を愛でながらしつとりという雰囲気には、ほとんど縁がない。  
 「おおの、盃はまどろこしい、コップでいこ、コップで！」などと叫びながら、いかに自己主張

### 但使主人能醉客 不知何処是他郷

というのがある。蘭陵の美酒は琥珀の光と香に満ち、主人が私をうまく酔わせてくれたら、他郷にいることを忘れさせてくれる。土佐の美酒をもって、そうであらんことを願って、四銘柄の特級酒を差し上げたが、「おいしい」との言葉は聞けなかった。「先生はどこのお酒が好きですか」と尋ねたら「秋田」であった。  
 ねばりけのある秋田の酒とさりとした辛口の土佐の酒では、風土と味の違いが大きい。木村氏は酒席の雰囲気は喜びながら、ご自分の好きな酒ははつきりさせた。その時にはがっかりしたが、お追従をいわぬところに芸術家の神髄が見えた。

土佐で自慢できるものは少なくない。その中に酒と酒席をあげる人もあろう。酒飲みなら特にそう思っているに違いない。しかし、人類の長い歴史の中で、喜怒哀楽を共にしてきた酒は、共通の財産ではあるにしても、自己流の解釈と好みで、人に強いるものではない。木村氏のお酒の楽しみ方はそれを教えてくれたようである。  
 「酒との人生」の中で七年余、ぱったり酒をやめた。断酒会のリーダーである某医師から「あんなに酒が好きだったあなたが酒をやめ、しかも宴席に長時間いられるのは奇跡です」と言われた。奇跡が精神的な苦痛もなく起きたのはなぜか、そして今、時と場合によって自在に飲めるのはなぜか。それに答えるには余白が少ない。ある有名人達の親睦団体の三十周年記念誌に「友あり酒ありて人生」と名付けたことをあげておこう。それが土佐人と土佐に来た人たちの

張をするかという愛すべき人が多い。少々くだいのうんざりする時もあるけれど、心暖かいから荒っぽい中にも、キラッと鮮やかな言葉で感激させてくれたりする。たまに、少し眉間にシワでも寄せて、知的風に飲んでる人の側に来ると、妙に落ち着かない。何を話しているのか緊張して、気がついていかにもバカな質問などして自己嫌悪に陥ってしまう。ついでに照れを大声でカバーして、ムードをこわし、また、落ち込む。でも注意してよく見ていると、こんなそっかしいタイプが結構いるようで何となく安心する。

酒と言えば、よく思い出すのが十六年前のこと。私は全く親の意に添わぬ結婚をした。それでも世間体をはばかった両親は、市内のホテルで披露宴をしてくれた。宴たけなわ、頬を赤く染めた父が、盃片手に近所のおじさんを伴って前へやって来た。「アイ、ブラザー、アイ、ブラザー」と、父はそのおじさんを指しながら彼に話しかけた。が、通じない。彼は暫くキョトンとした後、  
 「オオ、イエス、マイ、ブラザー！」と嬉しそうに言って、手にした盃を一気にあげた。青春の大半を軍隊で過ごした父が、後にも先にもたつた一度喋った英語である。結婚式の日もろくに覚えていない私なのに、このシーンだけは年ごとにふくらんでゆく。無器用で口数の少ない父の気持ちを思いはかる。  
 そして、なぜかジワと涙が滲む。  
 酒には思いやりと心に染みるひとことを……それは何よりも酒席を豊かに彩ってくれる。

(RKC調理師学校副校長)

### 酒と料理の相性

細川 明夫



親交を示すに最もふさわしかったからである。  
 (高知放送番組審議会副委員長)

平成四年四月一日より、日本酒(清酒)の級別制度が全面撤廃されました。級別制度の全面撤廃によって、清酒の消費動向がどう変わってくるかというのも気になるところですが、平成三酒造年度(三年七月、四年六月)に四国四県で生産される清酒の生産見込数量で、高知県が愛媛県を抜き四国一になりました。明治、大正時代には高知県下では酒造業は百五十軒はあり、戦争で企業整理の行われた時でも百三十軒もあったようですが、現在は二十二社になっています。今日の土佐の酒造業界の隆盛も、数多くの試練を得て四国一の生産量を誇るにいたったわけです。

フランス料理にはワイン、中国料理には紹興酒といわれますが、土佐の料理には土佐の酒。ただ土佐の料理を代表する皿鉢料理も今までの

### 友あり酒ありて人生

品原淳次郎



土佐と酒、切っても切れぬ。「酒国土佐」だけに酒の話は枚挙にいとまがない。ありすぎて書けぬものだとペンを握って気付く。  
 徴兵検査まで、といえは二十歳まで酒を飲んだことはほとんどなかった。酒飲みの熟柿臭い匂いが嫌いであった。新聞記者になっても、酒は飲めぬと思っていたし、周囲もそう思っていたようである。それがいつの間にか酒豪番付では三役入りするほどになっていた。土佐とは、新聞社とは、そういうところがあり、それが性に合っていたのである。

酒が飲めると仕事も接待もしやすい。多くの土佐人はそう思っているのである。  
 ある年、高知県展の写真審査員として木村伊兵衛氏(故人)が来られた。木村氏は酒も酒席も夜遊びもお好きだと聞いていた。  
 詩聖・李白の放浪中(?)の作に、  
 蘭陵美酒鬱金香  
 玉碗盛來琥珀光

料理の内容でよいか、素材、味、盛付、料理のサービスの方法など酒との相性、純米酒吟醸酒・本醸造酒など特定名称酒と呼ばれる土佐の酒が発売されていますが、ご自分で料理との相性を見つけたすのも、料理を楽しみ、酒を楽しむことではないでしょうか。また燗酒だけで飲むよりも特定名称酒なら冷やして飲むこともでき、ワインのように酒器を楽しむこともできます。

さて、幕末から明治、大正、昭和にかけて活躍した郷土土佐の武人、文人、政治家に「この人にこの酒をこの酒器で飲ませてみたい」をつくってみました。中岡慎太郎には辛口の酒を素焼の湯のみ茶碗でそれも冷やで、坂本龍馬には、一・八を前にして大ぶりの馬上杯を飲んでもらいたい。山内容堂公には特大吟醸酒。冷やめにして、朱塗の大杯で、後藤象二郎には銚子と盃で、酒は熱燗で、中浜万次郎は純米酒をグイ飲みグラスでぜひ飲っていたきたい。浜口雄幸には大吟醸酒を玉杯で、吉田茂は本醸造酒と少し燗をしてワイングラスですすめてみたい。さて料理は何をすすめようか、各方の人柄や性格、イメージで相性の料理を皆さんと考えてみたい。さてあなたなら、どんな料理をおすすめるでしょうか。

フランス料理や中国料理にも土佐の酒は合います。人的には国際交流は盛んになりましたが、これからは土佐の酒も、日本料理だけでなく、どんどん外国の料理にも相性を見つけて、交流の場を楽しくしていただけたらと思います。アメリカ大統領、フランスのミッテラン大統領、中国の最高実力者鄧小平に土佐の酒を飲んでいただくのが私の夢です。(土佐料理研究会主宰)

# 戦争に凝集した、昭和の青春

川添 歓一

階下のラジオがポリウムを上げて軍艦マーチを流し、続いて、「大本営発表、帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において……戦闘状態に入れり」

のニュース。それは繰り返され、私の耳にガンガンと響いた。零下三〇度の凍てついた京城（今の韓国ソウル）の二階の下宿部屋で、私はとび起きた。「やっぱり始まったか」とつぶやく。昭和十六年十二月八日の早朝のことで、私が旧制京城医学専門学校に入学して八カ月目、十九歳のときだった。四歳から歩んできた昭和のなかで、最初のドラマチックな出来事だった。

これまで弱肉強食が世界のならいの時代に、日本も世界の列強に伍してモノの言える立場を得るために、富国強兵を国是として、外に武威を發揮したため、近隣諸国とのトラブルが絶えなかった。ボヤが一瞬にし

て燃え上がるかのように、本格的な戦闘になったのが昭和十二年七月の日中戦争の勃発である。この中国戦線は意外に長期化し、拡大した。そして兵士予備軍ともいえる私たち旧制中学生の学校教育も軍事化を強めていった。

巻脚絆（ゲートル）を巻いての登校が義務づけられ、教練（軍事訓練）の時間も強化、陸軍将校の軍服教官もふえた。しかしこの教官たちも次々に戦場へ応召されて交代した。軍人による講演会も度々あり、授業を中止しては全校生徒で、その講演を聞いた。ある海軍高級将校は「感激性に富み、しかも実行に敏なるもの、これ青年なり。青年よ奮起せよ」と、講堂内に響きわたる声で叫んだ。十代の私には難しいことかわらう筈もなく、ただ国の指向する道を素直に受け入れ、胸に熱い血を滾らせていた。

中学校を卒業して京城へ来た時、ヨーロッパはナチスドイツ軍によって戦場と化していたし、東洋も新秩序建設を叫ぶ日本と、その武力行使を封じつつあったアメリカとの間に、険悪な空気がただよっていた。新聞論調も社会世論も「アメリカ撃つべし」と沸騰した。外交交渉は日米とも譲らず決裂。時の東条英機首相は「もう何も申しません」とラジオで暗示、数日を出ずして真珠湾奇襲をもって、日本は開戦したのである。

昭和十九年九月私は繰り上げ卒業して京城を發った。そして九州都城で見習士官教育二カ月の後、陸軍々医少尉に任官した。更に陸軍々医学校での本格的な軍陣医学教育を受けるために、昭和十九年も押しつまつた師走に上京した。私は二十二歳だった。東京新宿駅に降りたとき、警戒警報のサイレンに迎えられた。町な

かは空襲火災を予想して、火道を切るために惜し気もなく家が壊されていた。外面的にはのどかだった九州とは一変した東京の緊迫事態に、私は全身の毛穴がちぢむ思いだった。このころ日本海軍はほとんど壊滅。孤立した南方の島々の守備隊は援軍もなく、無惨にも次々に玉砕していった。サイパン、グアム、テニアン……そしてそこを基地にしたアメリカ空軍の「空の要塞」長距離爆撃機B29が、日本の心臓部、東京を爆撃し始めた。また万策尽きたフィリピンでは海軍航空隊が、体当たりの必死心中の神風特別攻撃隊を編成、出撃させていた。もう日本の戦いは、戦術の常識をとり出した、作戦といえない作戦を展開して、断末魔の様相だった。

われわれ将校学生は、近くの学校々舎を改造した合同宿舎に起居して、軍医学校に通った。昭和二十年に入つて三月一日、硫黄島は陥落。これより東京は、戦闘機の攻撃圏内に入った。三月十日B29の大編隊が、夜間東京の住宅地を大空襲した。この日われわれのいる新宿は攻撃目標でなかった。防空壕から首を出して、B29の通過を見上げていた。一機また一機、どえらく大きい爆音をたてながら、まるで大鷲がわれわれの頭

を撫でるかのように、超低空で通った。この空襲で東京の下町は全滅。この日から東京の無差別爆撃が激化した。百機を超すB29の大編隊は「ゴウゴウ」と爆音を東京の空に反響させながら、地上のわれわれを威圧した。硫黄島からの戦闘機も飛来した。迎え撃つ日本軍の戦闘機はもう、東京上空にはいなくなった。一日何回もの空襲で、防空壕を出たり入ったりで、講義もおちおち受けられず、郊外へ出ることが多くなった。

一方、四月一日沖繩へ上陸したアメリカ軍の援護艦隊千数百隻をめぐって、私と同年の若者たちが連日、死の特攻攻撃をかけた。もう涙も出ない悲愴そのもののなかに、日本はあった。余裕を持つアメリカ空軍は空襲の範囲を広げ、あたかも無人の野を焼くがごとく堂々と、時には予告までして各都市を焼け野原にしていった。

そんな五月二十日、私は陸軍々医学校を卒業した。学生の要望で学校側がやっと手に入れた材料で、湯呑コップ一杯ずつの豚汁を最後の馳走にした壮行会の後、もう生きて逢うこともなからう、それぞれが別れを惜しみつつ任地へ發った。私は六月一日最終任地の高知陸軍病院内科に着任した。そして両親のいる高知市大川筋から毎日、陸軍病院へ出勤で

きた。高知はまだ空襲も時々程度だった。しかしこの時沖繩戦は終局に入り、アメリカ軍の日本本土上陸は間近と思われ、四国沿岸には錦部隊、護士部隊など四

個師団十万の兵力が集結中だった。この部隊は「張りつけ兵団」として、撤退を許されない玉砕覚悟の部隊で、第一戦は四国山脈に置かれ、高知市内はその第一線の前にあった。軍人も市民もいまや、どのようにに潔く死ぬか、という破局



潮江橋辺りより高知城方向を望む（昭和20年7月7日）～高知市戦災復興史より～

の戦略に組み込まれていた。一カ月たった七月四日未明、終に高知市も空襲された。私は頭上より爆弾の雨を、初めて浴びた。自宅二階で寝ていた真夜中、階下の母の

「敵機がもう来てる」の叫び声にとび起きた。軍服を着る間もなく、直ちに道路をへだてた向かいの家の庭の防空壕にとび込んだ。両親や姉妹と共に、壕に入ったとたん爆弾落下が始まった。民家を焼き尽くす目的の焼夷弾攻撃だった。「ヒュ、ヒュ、ヒュ……」と音を高めながら落ちて来て「ズシン」と近くの地に突き刺さり、そのたびに防空壕が揺れた。しかし爆発しないので、つまり時限爆弾かと思っただけ、焼夷弾を束ねて民家を焼くので、耐える

かなり刻がたった。警防団員だらう「川添さん、お宅が燃えてますッ」と道から叫んだ。私は思わず壕をとり出した。軍服を着なければ……家の中に飛び込み二階へ。焼夷弾二本が畳に突き刺さって燃えていた。それを見ながら急いで軍服を着た。軍刀、凶嚢を腰に吊り、階下へ降りて長靴をはいた。これでいつ死んでも恥にならないと、勇気が出た。そしてとって返した壕には、両親も弟妹もいなかった。更に安全な場所を求めて移動したらしい。この時もう空襲は終わっていた。私は独り道に立って江ノ口川越しに、近くの高知城を見た。城山のあちこちに火の手が上がり、それは戦国時代の落城の様ながら。高知市内は視野の限り火の海、焰は天を焦さんばかり。それを見ながらも皆もなにかを思っていた。もし出来ることならここで目をつむり、しばらくしてパッと目を開いたら、十年後の平和な時代になっている、とならないのかなアと。個人の存在も意志も理想も埋没させた戦争の時代が一カ月後には終わり、百八十度転換した自由主義の世になり、私はこれからどう生きるか、戸惑いのなかに戦後の昭和を歩くことになる。

（高知市町内会連合会会長）

# 高知の山と森 (二)

## 魚梁瀬の森

西村 武二

魚梁瀬の千本山は長く憧れの森だった。林学を学ぶ者にとって、屋久島の森とともにいつかは訪ねなければならぬ森なのである。夢がかなったのは、前号に書いた剣山から尾根づたいに三嶺に登り、西熊の森を下って高知に初めて入った、あの後である。檜原のモミ、ツガ林の調査の後、ジープで室戸を回って京都に帰る途中に立ち寄ったのである。限られた時間内の駆け足登山だったので、十分に森を見ることはできなかった。ただただ巨木の群れに圧倒されたのを憶えている。

わずかに二週間ほどの間に高知の代表的な森林を三カ所も回ることが出来た。その年の夏はあの未曾有の台風10号が高知を襲った。それから三カ月も経過していたが高知の町には台風の残骸がまだ残っていた。しかし訪ねた森にはどこにも台風の痕跡

はみられなかった。あらためて、天然林の強さを思ったものだった。その時にはまさか翌年に高知大学に採用されるとは思ってもいなかった。こちらに来てから、わが研究室が魚梁瀬千本山の植生の推移を見るため、一九六七年から十年ごとに調査をしていることを知った。千本山に五〇メートル平方の永久調査区を四カ所、一〇メートル平方のものを三カ所設け、その中にある全ての樹木の位置、種類、本数、生長を調べるといふものだ。調査の度に調査区は追加され、現在では五〇メートル平方の調査区は隣接する人工林を含めて八カ所にもなった。

営林署の寮や旅館に学生とともに泊り込んで千本山に日参する調査は、真夏の一番暑い時期でありながら楽しいものである。登山口の千年橋に車をつけると、学生たちは一様に対

岸の巨木の群れに感嘆の声をあげる。橋のたもと、橋の大杉は樹高五四メートル、胸高直径一九六センチ、材積三五立方メートル、おそらく千本山で一番の巨木といわれている。ここから調査道具を背負って、つづら折りの急坂を登る。二本のスギが合体した親子スギまで登れば、後は平坦な道になる。

巨木の群れのなかで、何世紀にもわたって森林が育て上げたフカフカの土壌を足裏に感じながら、樹木がはき出す濃密な空気を肌を感じる。測り、四〇メートルは優に超える梢を見上げて樹高を測定し、樹冠の広がりやテープで確認しながら方眼紙に描きこんでいく。調査区は平坦な尾根筋だけでなく、支尾根の急傾斜地にもある。そんな所では、滑り落ちないように自分の身の安全にも気を配らなければならない。流れる汗に谷から吹き上げる涼風が心地よい。一日の仕事が終われば汗みずくになつて山をかけおり、西川の清流に足を浸し、汗を流し、しばし一息つく。色々なことが分かってきた。

上層林冠を構成しているモミ、ツガは十年当たり、ヘクター当たり四、五本の割合で風倒している。しかしスギの上層木の枯死はなく、スギがますます優占してきている。中層

の広葉樹は落葉樹のエゴノキ、ミズメ、カラスザンショウ等の枯死が多く、常緑樹のシキミ、ウラジロガシ、サカキ等はますます優勢になり、次第に日陰に強い樹種に変わりつつある。しかし中層、下層には次代の千本山を担うべきスギの若木はほとんどない。

この先千本山の植生はどう推移していくのであろうか。

スギはわが国の樹木の中で、最も大きくなり、しかも最も長寿の木である。屋久島のスギにみられるように、条件さえ許せば、千年、二千年と生き長らえるのである。そのような長寿のスギの一生にとって、私たちが探ったここ二十年余の変化はそれこそ瞬時の変化であろう。その一瞬の変化を捉えて、将来の姿など思い描けるはずがないのであるが、あえて推測してみよう。

上層木のスギの生長は盛んで枯れる心配は当分ない。大規模な気象災害や環境の破壊が起こらない限り、上層はスギが優占したまま太くなり、中層は耐陰性の強い常緑広葉樹が世代を交代しながらも占有し続け、現状の構造がかなり長期間、私たちの数世代後くらいは続くものと思われる。そのうち上層木のスギの枯れるものが出て来るだろう。しかし後継樹のスギの若木はほとんどない。ま



心身をリフレッシュ (千本山の巨木の森にて)

た上層木のスギが枯れた後、現状のように厚い落葉層が堆積して、中層に常緑の広葉樹が茂った状態では、スギの種が落ちてもそれが発芽して若木にまでは育ちにくい。可能性はあるのはスギやモミ、ツガ等、大径木の倒木の腐朽したものの上か、根倒れして土壌が露出したところであ

らう。たとえ局地的な更新が起こったとしても、今のような純林状態のスギ林は望むべくもない。かなりの頻度でスギの枯死が起こらなければ、スギの更新に断絶が起こるのである。スギの更新がスムーズに行われるためには、自然に任せておいてはできない。少なくとも藩政時代に行わ

れたような人手はかけなければならぬだろう。天然に落下したスギの種が発芽して、定着できるような場所を上層木の択伐(抜き伐り)によって作ってやらねばならない。若木が育てば、その生長をさえぎる上木をまた伐採しなければならぬ。そのようにしてスギ林の更新を図り、

現在の千本山に見られるようなスギの純林が出来たのである。それにかかった年数は、二百年から三百五十年である。誤解を恐れずに言くと、魚梁瀬千本山のスギ林は厳密には天然生林ではなく人工林である。人工植栽されたスギ林ではないが、人手をかなりかけて天然更新し、厳重に管理をして育てた森林という意味で人工林なのだ。自然の力に人手を貸してその力を活かせば、数世紀も経ると天然林と見まがうかしくも立派な森林となるのである。択伐によって天然更新された見本がある。千年橋を渡って左側の平坦

清遠 幸男(高知レポート5)	A5判 一二二頁	定価 一、〇〇〇円
高知県の工業		
土居重俊監修	B6判 二二〇頁	定価 一、〇〇〇円
高知市文化振興事業団編		
土佐弁 土佐日記		
岡林清水著	四六判 二七八頁	定価 一、八〇〇円
高知県文学散歩		
高知の文化を考える会編	A5判 一八八頁	定価 一、二〇〇円
高知の文化を考える		
高知市文化振興事業団編	A5変 二三四頁	定価 一、二〇〇円
わがまち百景		
高知県緑の環境会議森林研究会編	B5変 二二八頁	定価 二、五〇〇円
高知の森林		
筒井広道著	A5変 二五六頁	定価 二、〇〇〇円
画帳の歳月		
上森千秋著	A5判 二四〇頁	定価 一、五〇〇円
流れと波の科学		
土居重俊著	A5判 二一八頁	定価 一、八〇〇円
土佐日記(全訳)		
土佐重俊著	A5判 二一八頁	定価 一、八〇〇円
高知県方言辞典		
土居重俊・浜田数義編	A5判 七三六頁	定価 六、〇〇〇円*
高知の芸能		
高木啓夫著	B5変 三四六頁	定価 四、八〇〇円*
中山高陽		
清水孝之著	A5判 三三二頁	定価 三、八〇〇円*
外崎光広編		
土佐自由民権資料集	A5判 三四四頁	定価 三、〇〇〇円*
今井嘉彦著(高知レポート2)	A5判 一〇八頁	定価 一、〇〇〇円*
河川はよみがえる都市		
外崎光広著(高知レポート4)	A5判 一五六頁	定価 一、〇〇〇円*
土佐の自由民権運動		

\*は税抜き価格です

な所、巨木の中に二〇メートルにも満たないような若木が交じっている。ここは今から九十年ほど前に風倒木が沢山でて、三〇%ほどの択伐をした所である。露出した土壌や腐朽した腐材や切株の上に落ちたスギの種が発芽して、若木にまで生長したのだ。天然更新の参考地として大変貴重である。

ところでアメリカ北西部の太平洋岸の山地に、スギと同じ科に属するセコイア(レッドウッド)林がある。樹高は一〇〇メートル以上にもなるという世界一背の高い針葉樹だ。この森林の研究者ベッキンゲ博士は、太平洋を挟んで生育する近縁の千本山のスギとカリフォルニアのセコイアの比較に大変関心を示し、私達の研究を高く評価してくれている。

その博士が過日、来日の機会をとらえて高知まで足をのびされた。私達は二日間魚梁瀬を案内し、千本山や周辺の森をめぐった。氏が営林署の方々と私達に力説されたのは、自然の仕組みをよく観察し、それにもとづいて人手を適切に加えることが、天然更新にとっていかに重要かということであった。七十歳に近い高齢でありながら、森林研究にかけるその情熱は、セコイア林の精気の賜であらうかと思つた。

(高知大学農学部助教)

お申し込みは最寄の書店が事業団まで

# 高知の文化を考える

## 生の文化

川野 和子

手当り次第、友人を集める。  
—「高知の文化を考える」と聞かされたら何を思い浮かべる？

「書道ノ」

—ん？

「安芸にほら、立派な市立書道美術館が建っています」

—うーん。

「文学ノ」

—ん？

「アマが切磋し合って学ぶという文学学校の息の長さよ」

—なるほど。

「土佐和紙ノ」

—そうね。それは伊野にある紙の博物館を見ればよく分かるわね。

「ハチキンといごっそうノ あれ、これは文化とは言わんかな。けんど

気質というものは生物学的、遺伝学的要素に、高知の場合なら後に厳しい四国山脈、前には太平洋が果てしなくひろがって、逃げ場のない自然の環境に押さえつけられて作られた

「あれ、はや日が暮れたよ。お前の辛いこと。今夜も飲み会があつてねえ」

そそくさと、いや喜々として腰を上げると、哀れな偏頭痛持ちの私をあっさり捨てて、彼ら彼女らは全員消えていった。

食文化に限って考えてみると、かつおのタタキにしても、添えるものはニンニク、きざみねぎ、青じそ位のものである。ドロメやノレンレにしても酢みそか三杯酢。

土佐の料理には手のこんだ調理の文化はない。その単純さを指してやしる言もあるが、これは致し方ないことである。土佐料理には本来味付けや凝った技術は要らないのだ。素材の生の味をそのまま持つてくれば、これぞ至福の味覚だからである。獲れだちの海の幸、摘みたての山の幸に、(ロックフォールチーズ風味)とか(キノコ入りマスタートドソース)がなぜ要ろう。虹色に輝く清水鯖をパイの皮で包み、オーブンに入れる発想が、決してひらめかないところに、高知の食文化の真髓があるのである。

以前、京都府宇治市にある黄檗宗の大本山万福寺で、伝統の精進料理フルコースをいただいたことがある。味といい、盛りつけの様といい、ま

もんだから、その風土と伝統に揉まれて仕上がりつつあったんだから、やはり文化といえると思う」

—それが反権力指向という形になって、自由民権の発祥地となった。

「そんでもって、つまり革新市政の長さも文化と言ったりして」

—へえー。

「マンガに、日曜市に、絵金ノ」

—ボンボン飛ぶじゃない。

「ドロメ、ドロメ、ヨサコイなんかのサンシャインいっばいの祭り」

—ふん、ふん。

「古語の残る方言ノ」

—例えば？

「そうにかーらん。原型は(そうにか、あらむ)」

—夜中に目が覚めたとき使う(おどろく)というのなんかね。

そこへちよつとベシミストの中年紳士が加わる。憮然としている。

「そもそも高知に文化があるんか

ことに申し分のない出来映えで、ただだうーんと唸るばかりであったが、うつわの中に鎮まる素材の氏索性については首傾けるものが多く、若い修行者さまのご解説を伺ってはその素材の見事な変身ぶりと、細微な技巧に驚いたのであった。これこそ伝統に磨かれた食文化であろうか。だがしかしである。土佐では哀しいというべきか、幸せというべきか、ありのままの姿を横たえてもらえばそれで最高よろしいのである。



話は変わるが、私の海外旅行歴もそこその回数となった。全国から集まる参加者が簡単な自己紹介をする時がある。私はその時必ず「土佐の高知です」と頭に土佐をくつつける。高知だけを言うと、「高知ってどこだったっけ」という顔が必ず幾人か並ぶのが業腹だからである。だが土佐をつければハンでついたように「あつ坂本龍馬ですね」明るい顔が弾ね返ってくる。ところがテーブルの酒量があがり出すと、龍馬の格

ね」

「あらいで。パチンコ、喫茶店、トレンディなブティック軒並」

—言ってくれるじゃありませんか。

「トマトよ、高知のトマトは絶対文化ですよ」「小夏に文旦」「新高梨」

「やまもも、地酒、利き酒」「皿鉢、生け造り」「とんちゃん」

—そこまで入れたら、県民は文化で溺れ死にするわ。

「まともにゆきましよう。青い空に青い海。テーブルサンゴにリアス式海岸線」

—あはは、ちよつとへんなまともだけれど、さんご細工の彫りの技術は立派な文化でしょうね。

「ゆのすのきいた鯖の姿ずしは高知だけ。もつとも目を刺した鯖の頭が皿の中で立ってているのは、なんと

と気持が悪いと県外の人が言っていたけど、うつつい板こんぶの、カタビラを貼りつけたようなバッテラとはスケールがちがいます」

—そう言えば、この間高知の支社からいまは京都にいる方に鯖ずしを送ったら(桜と若芽の季節には、どうもおツムの工合が定かではありませぬ)なんて驚かす前置しておきな

が(鯖ずしは芸術品、宝石を食べるがごとき)と結構なあいさつでした。

「あじ、あゆ、かます、ひめいち

が「なめたらいかんぜよ」と方言に落ちてゆく。この二つのセットが県外人が認識している高知の文化ということであろうか。

作家司馬遼太郎氏が「竜馬が行く」を出版され、全国に龍馬ブームが湧き起こってしばらくして、氏が批判されたことがある。「土佐人の頭は何でもかんでも龍馬である。龍馬をもつてきさえすればよしというのは、土佐人の劣等感の裏返しではないか」という感じの厳しい分析であった。劣等感の裏返しとは思いがけない指摘と受け止める人もあるだろうが、他人(県外人)の目というものはよくマトを得るものといえよう。

革命児としては無論、思想家としても経済人としても、時代を先取りしたそのネアカなアクションの数々は、確かに土佐の豪快な風土と全く関係がないとは言えないし、私にとっても好きなほうのタイプではあるが、高知が産み出したあまたの人材の存在のPRにかける県民の怠惰と不勉強についてはもつともつと反省してもいいのではないだろうか。誇り高き生の文化も、対象によっては洗練を積み重ねていかないと、視野狭窄のステータスで固定してしまうだろう。

(土佐情報経理専門学校理事)

の姿も嬉しい。そうそう太刀魚の棒ずしもありますよお」

「かつおの生とタタキだけは、よその品は食べられん。うつぼのタタキも存外うまいよ。煮こごりや干物も酒にいい」

—土佐のかつおぶしは文化として定着しました。

「海の幸をいうなら、山の幸もユニークさではすごい。はちくの筒っぽにすしめしを詰めこんだのや、りゅうきゅうのにぎり、油揚げの代わりにコンニャクを使ったいなりずし。

こんなに鄙びて可愛い庶民の思い付き、なんとほのほのとあつたかい」

—浜あざみのくきや、山あざみの根つこのあえものも、よそにはないと思う。

「ウドやタラの芽は知っていても、いたどりを知らない、食べない県はたくさんあるみたい。たかがいたどり、されどいたどり」

「県外人と言えば、キシ豆入りのお番茶をうけるわね」

—あつとそれそれ、(県外人)という、みずからを差別する表現の頻発も土佐人の文化みたいよ。

「ふふふ」

かくの如き知恵袋ゆたかな友人に多く恵まれて、私は幸せというべきであろうか。いやそうとは言えない。

### ミュージカル津野山物語 製作開始

土佐に題材を求め、様々な分野で活躍する人々が協力して新しい舞台芸術を創りあげる「ミュージカル津野山物語」が、いよいよ製作を開始しました。

物語は宝暦年間起こった津野山一揆を軸に、「佐渡くどき」に歌われるお芳・五郎平の物語をミックスしたオリジナル作品です。

脚本・依光裕氏、脚色・茂松えんしよう氏、演出・武市哲夫氏に加え、作曲・橋田充哲氏、編曲・近沢知代氏、振付・藤間香緒留氏、新若柳多旬氏、國友須賀氏など多彩な方々にご協力いただいております。

また実行委員長を中越準一・梶原町長に引き受けていただき、高知市と他地域との文化活動を通じた交流を図る試みでもあります。

現在、一般公募による出演者三十数名が、歌や踊り、芝居の練習に汗を流しています。

どうか秋の公演にご期待下さい。

平成四年十月二十四日(土)

県民文化ホール・オレンジ

梶原町公民館

入場料 二千円

主催 高知市文化振興事業団

ミュージカル津野山物語

実行委員会

## 肌と肌が触れ合う 地域文化の拠点

### 赤岡町農協図書館

ドロメと絵金で知られる赤岡町に全国的にも珍しい農協図書館がある。農協設立三〇周年を記念して一九七八年（昭和五三）に設立されたもので、地域に根づくユニークな文化拠点として町民に親しまれている。

全国で農協図書館があるのは、他に静岡県内の三ヶ町農協と東大阪市英田農協だけで、全部で三つしかない。しかも独立の建物をもつ農協図書館は、この赤岡町農協図書館だけであり、これにかける意気込みが感じられる。

北代雅夫組合長は、この先駆的ともいえる取り組みについて「農協三〇周年を機会として、いままで農協を育ててくださった組合員、地域住民のみなさんに何かご恩返ししたい。それには地域の発展と社会に貢献でき、また地域全般の方々に喜ばれるものがない。そしていろいろ考えた末、人づくり国づくりの基本は教育にあるとの確信から、図書館の

建設を考えた」という。地域の未来を考えると、農協もまたその人づくりに役割を果たしていかななくてはならないというのである。

「快適なわがむら、まちづくり」をモットーに最近の農協活動は、営農指導や販売、購買、信用、共済、厚生事業などとともに、農協生活活動にも力をいれるようになっていく。だがこうした図書館建設といった文化活動にまでは手が及ばないというのが実情である。そこを思い切った決断し、町立図書館に匹敵する図書館を開設し、積極的な文化活動に取り組んでいくことは敬服に値する。

町民たちも「行政でなく農協が図書館をつくったことに意義がある」といい、また「農協がつねに幅広い住民と結びつくことを大切にしていることに好感をもつ」と評価している。まさに地域づくりにしっかり根を下ろした図書館といえるし、この図書館がこれからの活動を通して発

信していくものにこそ期待がもたれる。

うす茶色のタイル張り鉄筋コンクリート造り二階建の瀟洒な図書館は、赤岡町本町五四四の赤岡町農協のすぐ裏にある。延床面積二七二・六七平方メートル、一階が書庫と二〇畳の和室の会議室、二階が三〇席を持つ閲覧室と開架室、落ち着いた木製の書架に約一四、五〇〇冊の蔵書が並ぶ。蔵書の中でやはり多いのは文学の六、七〇〇冊、ついで児童書の三、五〇〇冊、その他となっている。蔵書数は必ずしも多いとは言えないが、基本図書がよく整備されていることと、精選された図書選択が行われていることが目をひく。学校図書館とも連携をはかり、図書の収集を行っているとのことである。図書



赤岡町農協図書館閲覧室

いが、基本図書がよく整備されていることと、精選された図書選択が行われていることが目をひく。学校図書館とも連携をはかり、図書の収集を行っているとのことである。図書

館専任の宮崎操さんは、子供たちから「図書館のおばちゃん」と呼ばれて親しまれているが、訪れてくる子供たちの姿を見て、ここで読書に親ばたいていくことを思うと、限りなく夢がふくらむと語る。こうした館員を得たこともこの図書館の未来を明るくしているといえる。

午後になれば小・中学生や近くの城山高校の生徒たちで賑わう。冷暖房完備の閲覧室は、夏休みや冬休みには子供たちの絶好の勉強部屋になる。一度に二冊、一週間の貸出しを行っているっており、年間五千数百冊が利用される。

もちろん利用者は児童・生徒だけではなく、全体の三分の一は成人である。なかには今晚のおかずをなににしようかと料理の本を探す主婦や、家に飛びこんできた野鳥の名前を調べにやってくる町民もいる。受験勉強の高校生もよく利用するという。

こうした活動のほか、一階の和室では「文学教室」（源氏物語、土佐日記、皆山集などがいまままでに取上げられた）や「折り紙教室」「ペン習字教室」「カラオケ教室」などの文化活動も催されている。ひらかれた文化施設として、息の長い活動が地道にその環をひろげているのである。

## 鏡川に沿って

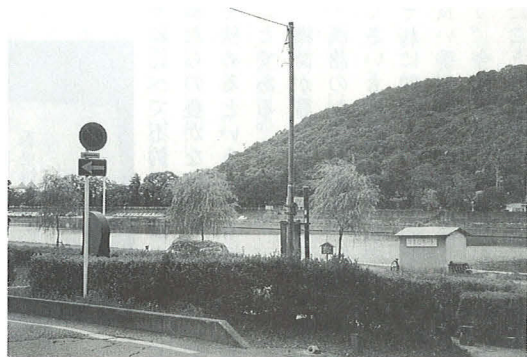
岡林 清水

清流鏡川は高知市を貫いて、今も静かに流れている。「櫻田義舉録」・『坂本龍馬関係文書』の著者岩崎鏡川は、この鏡川の源に近い土佐山村菖蒲に生まれた。優れた文才に恵まれ、東京に出て文筆活動を行ったが、次男の田中英光は、かなり色濃く父鏡川の血をうけ継いでいた。

田中がはじめて土佐の地を踏んだのは、昭和十年（一九三五）五月のことだったが、高知の町の印象を「ざらざら輝いてある陽の光りには黒潮の匂ひが一杯にこもつてゐた。」（『櫻』昭和十七年九月号「文藝」）と書いている。

徴兵検査の翌日には、父の生家を訪れ、そこで一泊。岩崎家の桜の老樹を眺めて、この樹の下を走りまわったであろう、父の幼き日の面影を思い浮かべた。

田中が鏡川の源に、わが命のルーツをたずねてから二年余りたった昭和十二年十月、鏡川の北岸築屋敷に、吉井勇が居を構え、国松孝子と新しい生活を始めた。今、上町二丁目から真つ直ぐ南に進むと、鏡川に架かる月の瀬橋に至るが、その北詰西（現、上町三丁目）の辺りである。歌集『天彦』・『遠天』などに、このころのことを記している。



鏡川・筆山を望む

東へ堤防に沿って歩むと、安岡章太郎の母（『海辺の光景』のモデル）の里である入交家があり、さらに進めば、大町桂月ゆかりの家の跡である。

柳原忠霊塔敷地の西隣りには、フランクチャムピオンの碑（大正七年鬼頭良之助建立・大隈重信撰文）が建っている。土佐の侠客鬼頭良之助が招いたテキサス生まれの飛行士が、高知の空に散った時の状況は、宮尾登美子の小説『鬼龍院花子の生涯』に詳しい。

山内神社の境内を東へ抜けた広場には、馬場孤蝶の文学碑「一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ」（『孤蝶日記』明治二十三年二月四日）が建ち、これより東方百メートルの道端には、「孤蝶・藤村交歓の地」の碑が建っている。明治二十六年二月二十三日、孤蝶をたずね島崎藤村が来高し、五日間ここに滞在した。

人さまざまのおもいを映して、鏡川は無心に流れているが、その河口に近く丸山台がある。かつてこの島に、龍宮城のような此君亭があり、土佐逃亡中の江藤新平もここに旅装を解いたし、自由民権運動家も、しばしばここで痛飲した。明治十六年八月二十九日、板垣退助が高知へ着いた時には、この小島で大歓迎会を開いたが、これを記念して「丸山台の碑」が建ち、今に土佐の情熱を伝えている。

（高知大学名誉教授）



山本泰三著

「土佐の墓」その一〜四

「これは有難い本が出来た」というのが最初の感想。墓碑（後世追慕のために建立したものを除く）は基本資料であり、墓所には一族や家系を知る手がかりもある。歴史を調べて人物に至り、人物から墓にゆきつくのは自然のコースだが、その墓探しに骨の折れることが多いからだ。著者に苦勞話を伺ったところ、ただ一言、「墓は呼んでも返事をしてはくれませんか」と笑ったが、県下に散在する二千四百余の墓を探しあて、記録をとり、写真をうつす作業は、考えただけでも気が遠くなるようなことである。勿論その前に、二千四百余人を選び、経歴を調べなければならぬ。

山本さんは、昭和五十五年に教職を退いてのち、本格的にとりかかったそうだ。「青苔蒸したものはこれを払い、倒れたものはこれを起こし、香を手向け、（中略）先人の生きた時代を思いおこし墓

と会話する喜びを求めて、くる日もくる日も、雨の降らない限り、寒暑と闘いながら先人の碑を探して歩いたという（「はじめに」より）。そして昭和六十二年には高知市内の墓を対象とした「その一・二」を出版し、昨年末には高知市以外の分を「その三・四」として刊行、前人未踏の事業を完結された。

B5版、各冊三〇〇ページは携行するによく、各ページに写真と記録と略伝がコンパクトに納まっている。もちろん索引もあるし、高知市内の分には詳細な地図も添えられている。昭和六十三年には高知県出版文化賞を受賞した。平成四年の平尾賞選考会でも最後まで候補に残り、著者の業績は基本的に調査研究として高い評価を受けた。

竹本義明注釈書・三冊

「鏡水百絶」

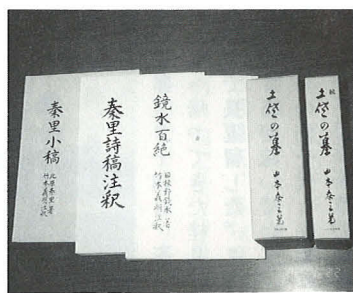
（著者日根野鏡水）

「秦里詩稿注釈」

（著者北原秦里）

「秦里小稿」

（著者、同）



近世日本の漢詩は、今日ほとんど鑑賞の対象とならず、評価される機会がない。これは漢詩が近世文芸の上で占められていたウエイ

トに比べて不釣合なばかりでなく、私たちの豊かな精神生活の可能性を狭めるという点でも惜しまれることである。

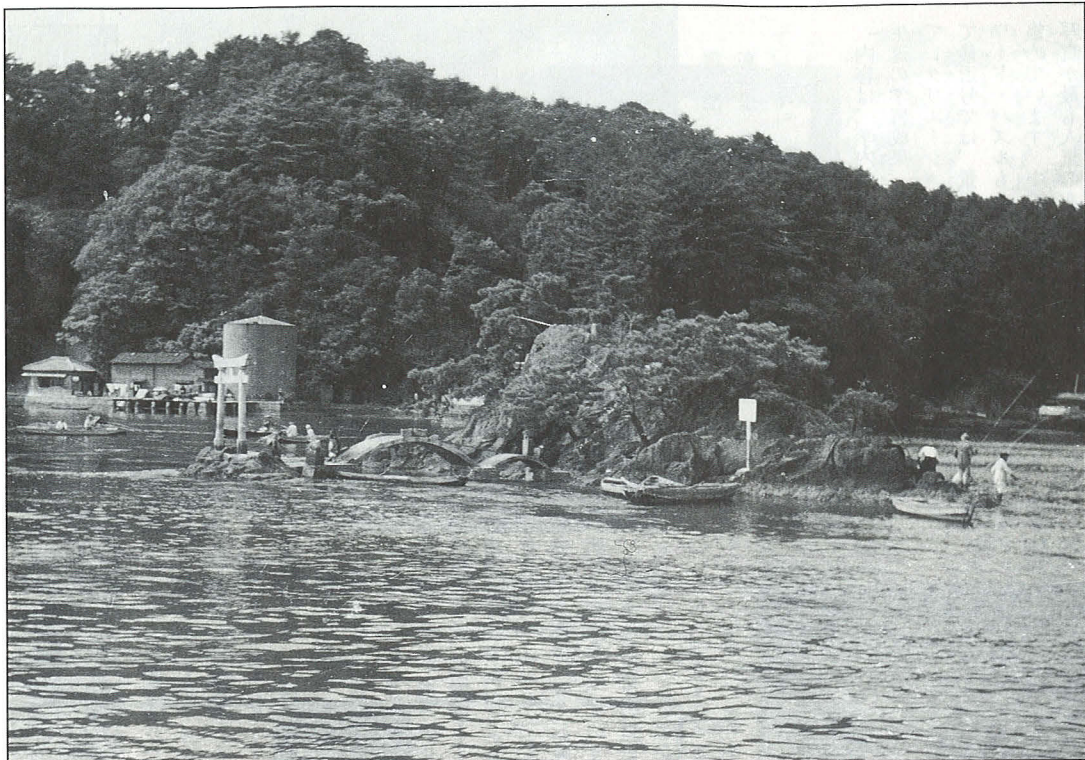
漢詩が読まれない原因は、漢字・漢語のむつかしさ、堅苦しく古くさいものという一般の思いこみ、それに加えて、鑑賞の助けとなる良い手引書がないことなどである。今回、標記の三冊が刊行されたことは、研究成果として意義があるだけでなく、漢詩再評価の流れを生み出すのに貢献するものと期待される。

日根野鏡水と北原秦里はともに天明五年（一七八五）の生まれ。

上士の鏡水は藩校教授館の頭取となり、嗽玉吟社（漢詩同好会）を主宰、没年齢は六十九歳。秦里は下士の家を継ぎ、江戸に出て詩才を称されたが、帰郷して四十五歳で没した。松魚歌と梅花の絵は絶品とされる。二人とも唐・明に代わる清朝の新詩風、性霊主義を奉じて文化文政期の土佐詩壇を革新し、多数の後進を育てた。その作品には、印象派にも比せられる色彩豊かな自然描写があり、日常生活の俳諧風の素描もあって、その新鮮な感覚と意表をつく表現には驚かされる。

竹本義明氏は土佐女子中高校の国語科教諭、「土佐史談」に毎号欠かさず近世土佐の文人に関する優れた論考を発表している。紹介した三冊は、数年来の研究成果をまとめ、ワープロ自家版として公にされたものである。本文では各々の詩をよみ下して大意を説明し、語句に注をつけ、巻末には解題や年譜、一族の系図等が添えられている。解題・年譜もまた立派な研究の成果であり、詩人たちの生活や交遊、時代の背景をあわせて、より興味深く味わうことができる。（依光貴之）

第8回高知の映像コンテスト入賞作品



高知を撮る

狭島

川島 正敬

かりに手づかみで食事をするのが野蚕だとすると、ヨーロッパの人々は十五世紀まで野蚕の中で生きたことになる。スプーンやフォークがヨーロッパで使われたのは十五世紀ごろからで、それまでは貴族といえども手づかみで食事をしてきた。

箸は中国、韓国（朝鮮）などでも使われるが、その歴史はずっと古く、日本でも素戔嗚尊や三輪山の神の伝承に見られるように古くからあった。そして奈良時代以前に一般に浸透したといわれる。世界中にはいろいろな食事があり、それがよくてこれが悪いというものではないが、日本のように何でも食べ料理法も複雑なところは、箸の便利さは他の

箸



風俗歳時記

このように日本の食文化は、箸をぬきにしては考えられず、食事作法としての箸の使い方が厳しくつけられた。たとえば、「ねぶり箸」「迷い箸」「移り箸」「さべり箸」「刺し箸」「もぎ箸」「こみ箸」「渡し箸」「せせり箸」「寄せ箸」「および箸」「まわし箸」など、タブーとされた。だがいまはそれを知る人も少なくなつた。以前はこうしたマナーをどれだけ知っているかで、その人がどの階級に属するかが識別されたものだ。正しい箸の持ち方が出来ない子供が、すごい勢いで増えているが、子供

比でない。固いもの柔らかいもの、大きいもの小さいもの、角いもの丸いもの、どんな形と質のものでもはさむことができる。また、はさんで切ることもできるし、汁を飲むときなど、碗のへりに口をつけて吸えばいいのだが、やはり箸を使

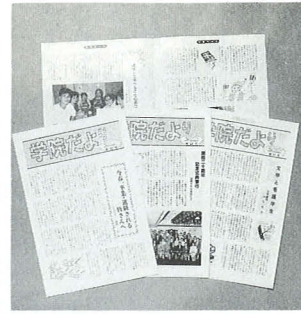
だけでなく三千歳代の母親の三人に一人がそれができないという。二十歳代では駄目な半数以上になるという。子供に言う前に親の方が落第なのだ。やがて日本人の大半が、握り箸で飯を食うなどというへんな食文化が蔓延しないように願いたいものだ。（晋）

## 同窓生の看護の灯火

河添カズ子

### 高知市立高等看護学院「学院だより」

「学院だより」は、開校四年後の昭和五十年創刊され、以来年二〜三回発行してきました。次号の第53号は、七月発行します。この学内誌は、当時の教務主任上村先生（現高知医科大学附属病院看護部長）が、卒業生と在校生とのパイプ役を果たすようにと提案されたものです。編集委員会は、職員と各学年から選出された計十名で構成されており、そのため企画から原稿依頼、編集校正まですべて職員の協力のもと学生達の主体的な活動で運営されています。



内容は、学内での各種行事の様子や学生達の学習成果、学生間の自由投稿としてレクリエーションのお誘いなど、そして最近号では、景品の図書券つきクロスワード・パズルもあり、愛読者の人気を集めています。中でも新入生紹介の個人写真が最も人気のあるものです。また、「学院だより」の顔でもある表紙の一面は、講師の先生方がご投稿下さり、学生

### 高知市老人憩所の文化活動

## いきいき健康的に

三原 延子

昭和四十八年七月に開設された高知市老人憩所は、昭和五十七年十月から高知市老人クラブ連合会が高知市より全面委託をうけ、業務を行っています。定例講座は、茶道・華道・書道など十講座で、月二回の受講で一年間です。そして、二年目からは各講座のOB講座となつていきます。また自主講座も和紙人形・陶芸・謡曲などと盛り沢山、その他に特別行事として、高齢者と子供のふれあい行事で五月「子供の日の集い」、七月「七夕まつり」、十一月「お茶会」、二月「節分豆まき集会」等、お隣のふくし園の園児と交流を行っています。そして、日々学んだ成果の発表の機会として、十一月には「手作り文化祭」、十二月には「年忘れ演芸大会」を開催し、高齢者の生きがいを高めています。

年々高齢者の意識も変わり、健康に対する関心が高くなってきて、体を動かす民踊・社交ダンス・健康体操などに人気が集まり、十年前までの様に



### 「高知仮説サークル」

## 楽しい授業の教育実践

松田 明彦

「科学上の最も基礎的、一般的な概念を、熱心な教師なら誰でも子どもたちに楽しく教えることができる」という仮説実験授業を中心に、「授業が楽しくなくなる最大の原因は、子どもたちに十分納得のいかないことを押しつけていることにある」、本当に学ぶに値することは、楽しく学べるはずで、その学習の中で子どもたちは大事なものを発見し習得する。楽しく学んだ知識こそが身につく、子どもたちが自分の素晴らしさを発見する。そうした学習法、即ち楽しい授業をすすめる教育実践」を研究するサークルです。

若い教師の学習会としてスタートしたサークルも十年になり、ますます好調に活動しています。主として幡多地区の小学校教諭がメンバーですが、前号で紹介されたキリン館店主をはじめ、会社員、看護婦など、



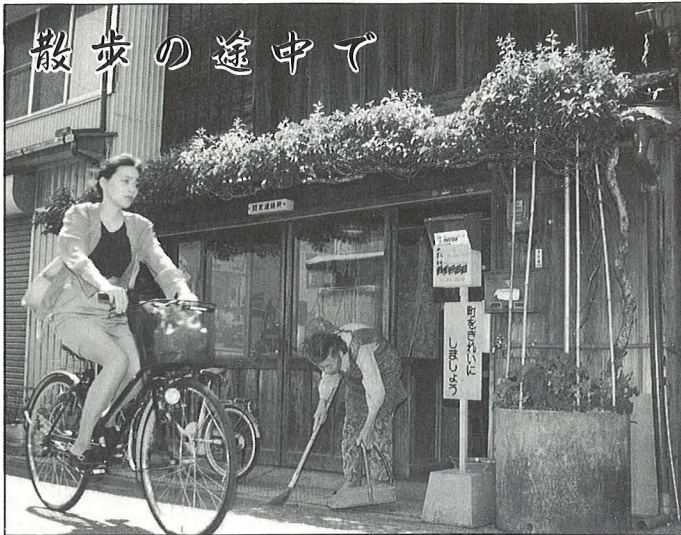
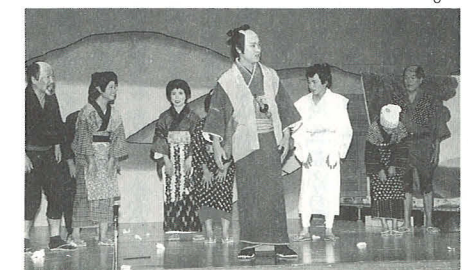
### 高知一般労働組合の文化活動

## より強い連帯をめざして

宮崎 忠夫

高知一般労働組合は、主に県下の中小企業に働いている労働者が加入している労働組合です。職種を問わないので、いろいろな方が加入しており、現在組合員は約三〇〇人、今年で結成三十七年目を迎えています。昭和四十年頃の県下では、あちこちの職場で労働争議が起きていました。こうした時に、争議中の労働者とその家族の方々と激励・支援しようというこ

とで、組合として年一度、秋に「文化祭」を開催することになりました。これには黒瀬前組合長の発想と尽力がありました。そしてここの収益金はやかつてはカンパとして争議中の労働者の支援にまわされ、職種の異なる労働者間の連帯を深めることになりました。この「文化祭」も今年で二十七回を数えませんが、職場対抗の（演芸）コンクールはそれぞれの時代風刺をさかし、人気を集めています。



## 散歩の途中で

旭など古い町並みの残る地域の辻などで、ちらほら見かけるコンクリートの丸や四角の巨大な植木鉢、実はこれ、戦時中に設けられた防火用水槽。空襲の折、火災、延焼、飛び火などに備えて町内のあちこちに設置され、その傍にはバケツ、火の粉を叩き消すジャンボハタキ（のようなもの）が常備されていた。今では無用の用をなし、平和の象徴のように草花を育てている。

## 風俗

### 近代文学館に 研究機関を

さきごろ、県が郷土文化会館を近代文学館にする基本方針を固めたというニュースをよるこんでいる。おそろく今年のビッグニュースのひとつになろう。高知は近代文学の宝庫でありながら、それを系統的に収集する施設、研究機関がなかった。そのため高知の近代文学のものが誇れる価値を、ひとつの流れとして近代日本史の視野のなかでとらえ、浮かび上がらせることも遅れてきた。貴重な文化遺産が、ばらばらのまま野ざらしにされてきた感があった。明治期をみて、中江兆民以下、多くの硬派ともいべき文学者が、日本の近代文

(陸)

達に温かいコートを贈っていただきます。学院長山本彰芳先生からは、「相手のことば」（26号）ほか数多く、看護学生として何を学ばよいか多くの示唆をいただきます。働きながら学ぶ学生達には、こうした課外活動は大変です。しかし、授業では得られない貴重な体験です。同窓生の看護の灯火「学院だより」、これからも発行を続けていきたいと思っています。

連絡先 高知市丸の内一七四四五  
電話 〇八八八二二一九七二七

紳士淑女的静かに学ぶ講座は、定員に達することがなくなっております。それだけ元気なお年よりの増えていることがうかがえ、うれしく思っています。老人憩所に通っている高齢者の方々は年齢を感じさせない若さと健康でいきいき輝いています。

今日の健康を少しでも長く保つ為に、皆さん楽しみながら頑張っておられます。どうぞお気軽にご利用下さい。

連絡先 高知市百石町三一―九  
高知市老人憩所  
電話 〇八八八二二一九七二七

仮説実験授業に興味を持つ人たちの参加があります。毎月第三土曜日の例会（中村市）の他にも年数回の研究会や、子どもや一般対象の「わくわく科学教室」などを通じて科学の楽しさを広めています。また、南国市でも「土佐町サークル」（代表・松木文秀）が活動しており、仮説実験授業を中心にして楽しい人生というもので考えています。

参加資格などは一切ありません。ぜひ一度のぞきにきて下さい。

連絡先 大方町有井川一四六五一  
電話 〇八八〇一四四一―一五八八

また構成劇は茂松えんしゅうさん、裏方の道具づくりは司亭升楽さんのご指導で、年々素晴らしい舞台となっております。この「文化祭」も、一昨年から「はたらく仲間の文化祭」とし、県下全労働者へと輪を広げています。今後とも、県下のはたらく仲間の連帯を強め、更にはこの活動が、県下の村おこしの一つにもなればと頑張っています。

連絡先 高知市東雲町八一―二二  
高知一般労働組合  
電話 〇八八八二二一九七二七

# 文化セミナー '92

## 「時代を生きる」

7/6 (月) 6:30pm~8:30pm 高知共済会館 3階ホール

『情報化社会を解説する』

成田 康昭 中京大学社会学部助教授

7/16 (木) 6:30pm~8:30pm 高知共済会館 3階ホール

『豊かさの中の日本人

—競争社会と自己実現—』

広岡 守穂 中央大学法学部教授

7/25 (土) 1:30pm~3:30pm 高知共済会館 3階ホール

『環境問題を通じて見た世界の未来像』

加藤 尚武 千葉大学文学部教授

参加費：各回500円 定員：申込先着100名

◎お申し込みは…(財)高知市文化振興事業団まで

ドイツ・ウルム市からの日本縦断ミニコンサート

### ウルマー・カンマー・アンサンブル

日時 7月17日(金) 開場 pm.6:30 開演 pm.7:00

会場 高知市自由民権記念館

入場料 前売り2000円(当日2300円)

主催 高知市文化振興事業団

ウルマー・カンマー・アンサンブル実行委員会

ドイツ・ウルム市などヨーロッパを中心に活躍する演奏家を招き、市民と交流するコンサートを開催します。一昨年の高知での演奏会は、多くの方々にご好評をいただきました。今年も素晴らしいコンサートが期待されます。ぜひご来場ください。

(メンバー)

磯村 寿彦 ヴイオラ

磯村みどり ヴァイオリン

杉本 暁史 ファゴット

星井 暁子 ピアノ

山下 洋一 ヴァイオリン

\*チケットは市内主要ブレイガイドおよび事業団で発売中。\*託児所あり。

ハンス・ヨアヒム・チェンバー・チエロ  
グドゥルン シンクレアー クラリネット

●賛助出演

須賀 陽子 ヴァイオリン

山崎 晶子 ピアノ

### こどもの本を語る第7回高知大会

と き 平成4年8月2日(日)

午前9時30分~午後3時30分

と ころ 潮江市民図書館

\*講演 午前10時~正午

「私の訳した本とその作家たち」

講師 岡本浜江さん(英米文学翻訳家)

\*分科会 午後1時~午後3時30分

■協力券 千円(幼児託児所あり)

お問い合わせは、ホキ文庫(☎222-7621)まで。